

国史跡 宮山古墳 陪冢

ネコ塚古墳（第1次調査）

現地説明会資料 2025年12月14日（日）





北トレンチ 完掘写真（南西から）



南トレンチ 外堤（西から）



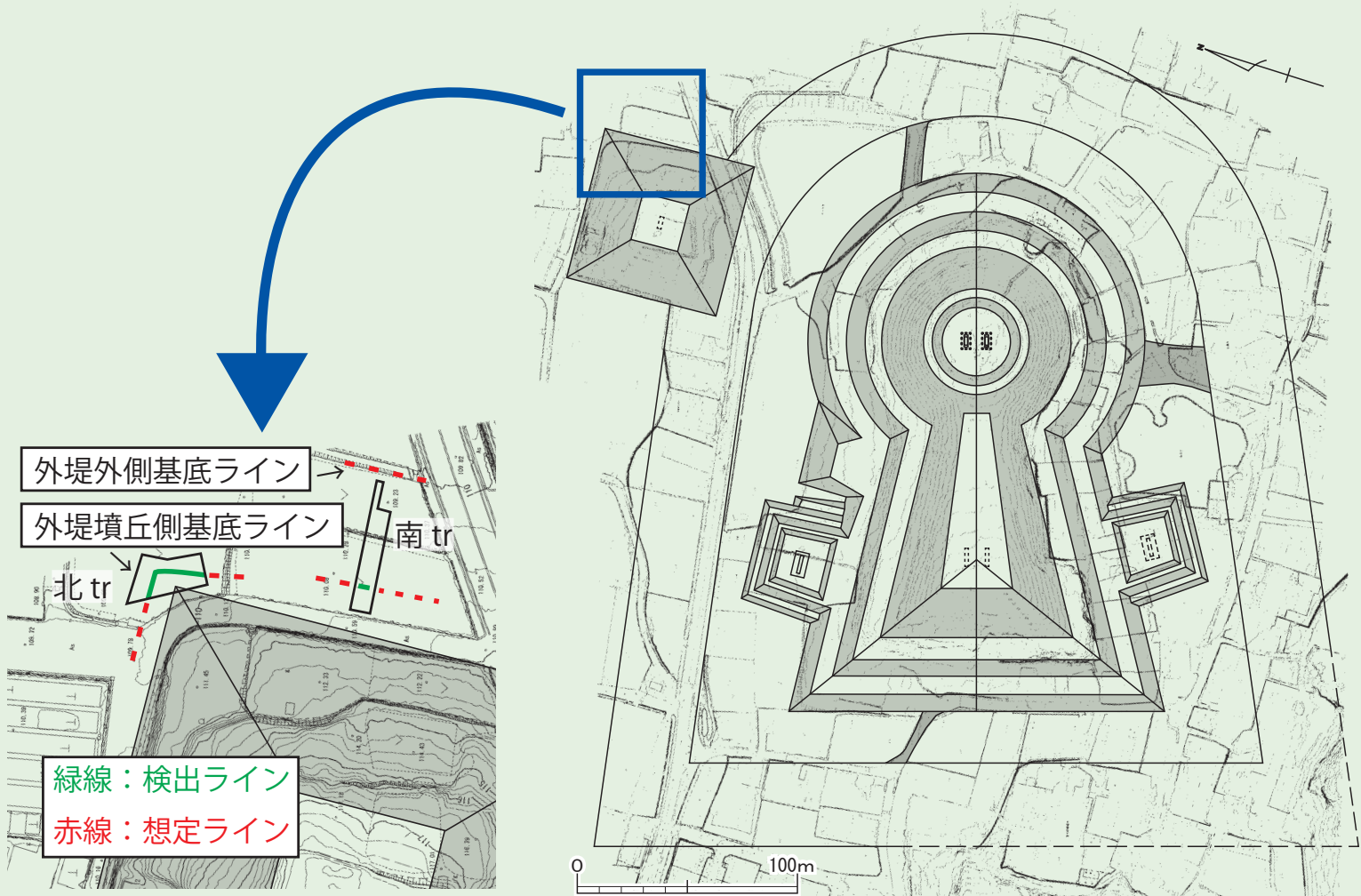
北トレンチ 葺石上面に転落した円筒埴輪（南から）



ネコ塚古墳と調査地（北東から）



ネコ塚古墳調査区 俯瞰写真（左が北）



宮山古墳の墳丘復元と今回の調査成果の関係
(室宮山古墳範囲確認調査報告Ⅱより一部加筆)

～はじめに～

ネコ塚古墳は、5世紀前葉に築かれた墳丘長245mの前方後円墳である国史跡宮山古墳の陪冢とされている古墳で、宮山古墳の北側周堤に接するように位置する、一辺70m前後の方墳です。明治年間に大規模な盗掘にあったようで、墳頂部に結晶片岩が散乱する様子から、埋葬施設に竪穴式石室を採用していたと考えられています。墳頂を中心に採集された遺物には、鉄製刀剣類のほか、鉄鏃、衝角付冑に伴う三尾鉄、三角板革綴短甲、頸甲、円筒埴輪などの破片があります。

今回の調査は、ネコ塚古墳の墳丘規模を確認する目的で実施しました。平成元年に国道309号線の歩道を整備する際に、ネコ塚古墳に接する宮山古墳の外堤の発掘調査が行われていますが、ネコ塚古墳に対する発掘調査は行われておらず、今回が初めての発掘調査となります。

～調査の成果～

今回の調査では2つのトレンチを設定し、それぞれのトレンチで、ネコ塚古墳に伴う、周濠、外堤、外堤内側斜面に葺かれた葺石を検出しました。

・周濠

北トレンチでは、宮山古墳の南に位置する巨勢山丘陵から伸びる尾根の地山を掘り込んで周濠を設けたことが確認できました。一方、南トレンチでは、北トレンチと様相が異なり、周濠埋土の下層には西から東にかけて傾斜する自然堆積層を確認しました。また自然堆積層と周濠の底とみられる層との間には、黒色と青色のブロックが混じる層を確認しました。この堆積が古墳築造時の整地層であるかは判然としませんが、ブロックが混じる層の上面の標高と北トレンチの周濠底面の標高がおおむね揃うことから、周濠掘削時に高さを揃え築造した可能性も考えられます。

周濠埋土は下から泥層、泥炭層、泥炭層に有機物が混じる土壌化層の順に堆積していることから、一定期間滞水状態が続いていたことが想定できます。

・外堤

今回の調査では外堤の外側の基底を確認することはできていませんが、ネコ塚古墳東側の現在の水田の高低差から外堤の幅は、約15m前後であったことが想定できます。また葺石と転落石の間に

は外堤側から転落したとみられる円筒埴輪の破片が複数みられ、外堤の上部には円筒埴輪が並べられていたことがわかりました。

外堤の築造には、周濠を掘削した際にでた地山由来の土を用いて盛土を行った様子が南トレンチで確認できました。さらに盛土には地山由来の土に加え、黒褐色の粘質ブロック土がまばらに入っていることが確認でき、外堤の築造方法を復元できる成果となりました。

・葺石

外堤内側斜面に葺かれた葺石と後世に外堤から崩れた転落石を確認しました。葺石には、古墳周辺で採れる拳大から人頭大の石英閃緑岩（花崗岩の一種）が用いられています。

外堤内側斜面の立ち上がり付近には、他の葺石より大きな石材を基底石として据えている状況が確認できました。また一部の葺石では目地をそろえた様子も確認できます。北トレンチの北側基底石は石材の長軸を横に据えるのに対し、東側基底石は石材の長軸を縦に据える様子が確認できます。葺石の敷設方法が違うことから、施工グループが異なっていた可能性があります。

葺石を据える際には、石材を固定するために、地山由来の真砂土を用いた粘質な土を、裏込め土として用いた様子も確認できます。

～まとめ～

今回の調査では、ネコ塚古墳で初めて、周濠、外堤、外堤内側斜面に葺かれた葺石の存在を確認しました。また、今回の調査で出土した円筒埴輪は、宮山古墳で出土している円筒埴輪と類似した特徴を持ち、時期差が認められないため、宮山古墳の埴輪と同時期に製作された可能性があります。

北トレンチでは、周濠のコーナー部分を検出したことにより、ネコ塚古墳の墳丘規模を従来より更新し得る成果を確認しました。また南トレンチでは東側外堤の幅が15m前後になることが確認できました。墳丘規模については一辺70m前後の方墳と考えられていましたが、周濠が確認されたことで、墳丘自体は一辺60m前後とやや小さくなる可能性が考えられます。一方で、今回検出された外堤が西側にも存在したと仮定した場合、周濠、外堤を含めた古墳の全長は100m前後に及んだ可能性が考えられます。

